興味津々

このコーナーでは、「大崎ライフ」をより楽しむための物や技、場所などを毎月紹介していきます。

三本木亜炭記念館へ行ってみよう！

三本木地域発

かつて、優れた炭質で全国的に知られた「三本木亜炭」。三本木・道の駅「やまなみ」隣の「三本木亜炭記念館」では、そんな「三本木亜炭」の歴史を知ることができます。

三本木地域鳴瀬川南側の丘陵地帯では、明治の半ばから昭和四十年ごろまで、暖房や産業の燃料の主流だった亜炭採掘が行われていました。亜炭とは石炭の炭化しきっていないもので、石炭に比べて発熱量の小さいものですが、三本木で採掘される亜炭は、熱量が高く炭質が良いため「三本木亜炭」として重宝されました。

三本木亜炭の発見は、正保～慶安（一六四四～一六五一）年間で、水路工事中に黒い石を掘り当てたのが最初とされていますが、それが燃料だと知られるのはそれから二百年もあとのことで、蟻ヶ袋村の村民が炭焼きをしていたとき、露出していた黒い石に火がついて燃えだしたという偶然によります。

時代が明治に移り、燃料として実用化されるようになると、三本木では次第に薪の代わりに使用する人が多くなり、明治十五年ごろには、商売として亜炭を採掘し始め、販売していたという記録が残っています。

戦前・戦中には重要物資とされ、石炭の代用燃料としてもてはやされ、戦後も安価な燃料として流通し、需要は大幅に伸びました。しかし、世の中ではエネルギー改革が起こり、熱効率の悪い亜炭は石油に押され需要も減少し、昭和四十年頃には採掘も終わってしまいます。

「三本木亜炭記念館」は、亜炭産業の歴史を未来に伝えるために、平成元年に開館しました。記念館では、亜炭の生産から消費までをわかりやすく紹介しているほか、最盛期の実物大の坑道も再現されていて見ごたえ十分です。また、重さ十トンもあるという日本一大きな亜炭柱は、地球の力の偉大さを物語っています。

▲①亜炭産業が隆盛だったころの貴重な展示品の数々。②昭和56年、三本木地域伊賀地区から採取した残炭柱。幅1.8m、高さ1.9m、奥行き2.0m、重さ約10t、日本一大きい亜炭柱。

三本木亜炭記念館
大崎市三本木字大豆坂63-24
三本木道の駅「やまなみ」隣
開館時間▶9時～17時　入館無料　☎52-6232

大崎情熱

昔は小川で泳ぐたくさんのメダカを見かけましたが、生活環境の変化により激減し、現在は環境省レッドデータブック絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。そのメダカを田舎の原風景によみがえらせたのが、「メダカおじさん」の愛称で親しまれる高橋孝憲さんです。

十年前、勤めていた会社を退職した高橋さんは、「幼いころ好きだった遊び場、生き物がたくさんいた自然を取り戻したい」と、本格的にメダカを飼育するため、地元の休耕田を利用してため池を作ります。これが、メダカのふるさと「メダカの郷」の始まりでした。

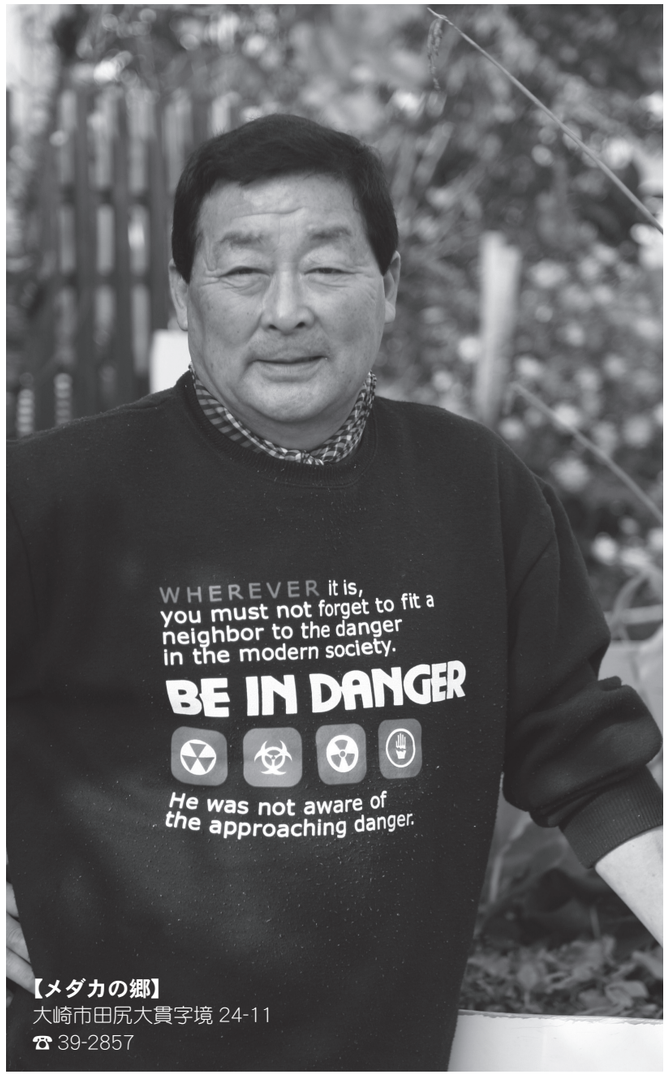
当初、ため池には十匹しかいなかったメダカですが、今では百万匹以上までに増えました。高橋さんは、「ブラックバスのような外来魚や生活排水が入ってこない自然に近い環境が整っているから、みるみるうちに増えていくんだよ」と、増殖し続ける理由を教えてくれました。メダカのほかにも、タナゴやヌマエビ、ゲンゴロウなど、メダカの郷には、さまざまな生物が住んでいます。

自分が住んでいる地域だけでなく、全国各地でメダカが増えてくれることを願う高橋さんは、メダカの里親を募集したり、プランターを利用したビオトープの作り方を教える教室を開くなど、絶滅の恐れがある淡水魚をみんなで増やそうと精力的に活動しています。

「昔のように日本中の小川でメダカを見れるようにしたいね」と話す高橋さん。大切に育てられた「子どもたち」は、親元を離れ、各地へと生息場所を広げることでしょう。

日本中をメダカでいっぱいにしたい

メダカの郷主宰
高橋　孝憲さん（田尻地域）



【メダカの郷】
大崎市田尻大貫字境24-11
☎39-2857

①②メダカの郷では、元気に泳ぎ回るかわいいメダカたちの姿を見ることができます。育てたい人には無償で譲ってくれるそうなので、興味のある人は足を運んでみましょう。